http://decfamily.p1.bindsite.jp/2013NEW/

We 25R

No.331　14/02/14

現代学生百人一首

東洋大学は毎年「現代学生百人一首」を募集しており、2月になると入選作が発表される。「秀逸作品」に選ばれたものの中から、高校生の作品を紹介しよう。（歌の後に添えられている文は、その歌の選評である）

＊

■バスの中単語帳とにらめっこ
　古語は変顔英語は堅物　（高２）

試験対策のみならず英語でも古文でも単語の暗誦・理解は必須条件だ。しかし、得意な人は別として、古語は現代人には難解だし、英語は何年努力しても取っつきにくい。作者は古文には親しみを抱いているのだろう。日本語のくせにへんちくりんな顔だけど憎めないやつだ、と。一方、英語には少し手こずっているのだろうか。こいつめ、スキを見せないんだから、と。古語を変顔と、英語を堅物とそれぞれの印象を隠喩によって表現したところが実に巧い。（鮫島満：歌人）

■「いきます」と上げた右手が震えても
　バーの向こうの空を見たくて　（高１）

■赤信号足もと見るとクヌギの実
　秋の日暮れの良き待ち時間　（高３）

■父の日に恋しくなって空を見た
　探していたよ父似の雲を　（高１）

■雪化粧歩みためらう美しさ
　瞼にやいて回り道する　（高１）

■貸していた教科書のすみさりげなく
　君のまるじで「好き」の二文字　（高２）

■都会から地元へ帰るバスの中
　ぽつりぽつりとまた灯が消える　（高２）

作者はバスで都会の学校の通学しているとのこと。帰りの車中で、一日の出来事や明日の事などを考えながら窓外を眺めると、地元に近づくにつれ家が減り、外灯も一つ一つ消えてゆく。見馴れた景色なのだが、なぜか作者はセンチな想いに駆られている。下句の「ぽつりぽつりとまた灯が消える」という風景に、どこか安堵とさみしさの交わる気持ちが込められていよう。「ぽつりぽつり」の一語が一首の情調を支え、味わいのある歌となっている。（神田重幸：東洋大学名誉教授、近代日本文学、島木赤彦研究会名誉会長）

＊

私はここに挙げられている歌は、どちらかというと

「歌の詮とすべきふしを、さはと言ひ表したれば、むげにこと浅くなりぬる。」

と、俊恵的な？感想を持つのだがどうだろう。例えば、二つの目の歌は「見たくて」、三首目は「良き」、四首目は「恋しくなって」、五首目は「美しさ」…。

「秀逸作品」には選ばれなかったが、私がイイなと想ったのは、

■肉じゃがを笑顔で作る母親の
　背中を私が受け継いでいく　（高３）

■手にスマホ耳にイヤホン目は下に
　残る五感は味覚嗅覚　（中２）

二首目は何が言いたいのか分からない（「味覚嗅覚」もマクドやスナック菓子の汚染から「残る」ことはできないかも…？）が、言葉遣いが面白い。一首目は「笑顔で」が想像力の幅を狭めてしまって残念だが、「受け継いでいく」の潔さがいかにも若者らしい。こういう歌を詠めるのが若さの特権である。